

1. 調査目的等

小・義務教育学校1年生から6年生の児童の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証を行うことを通して、学力向上に関する取組の改善に役立てる。

2. 学校ごとの指標

【短期目標】令和6年度の標準学力調査で、学校全体の標準スコア48を目指す。

【中期目標】令和8年度までに、標準学力調査で、学校全体の標準スコア50を目指す。

3. 指標にむけての取組

○主題研究をもとに、生徒指導の実践上の視点を生かした授業展開を行う。授業の中で、「学びを見つめ直す」振り返りを取り入れる。

○単元構成を工夫し、終末段階における形成的評価を生かした習熟の時間を位置づける。

○朝の活動の時間に、学びタイム(火・水・金)を設定し、専科によるテンミニ+αの解説(上学年)と、読み・書き・計算(下学年)の反復練習を行う。

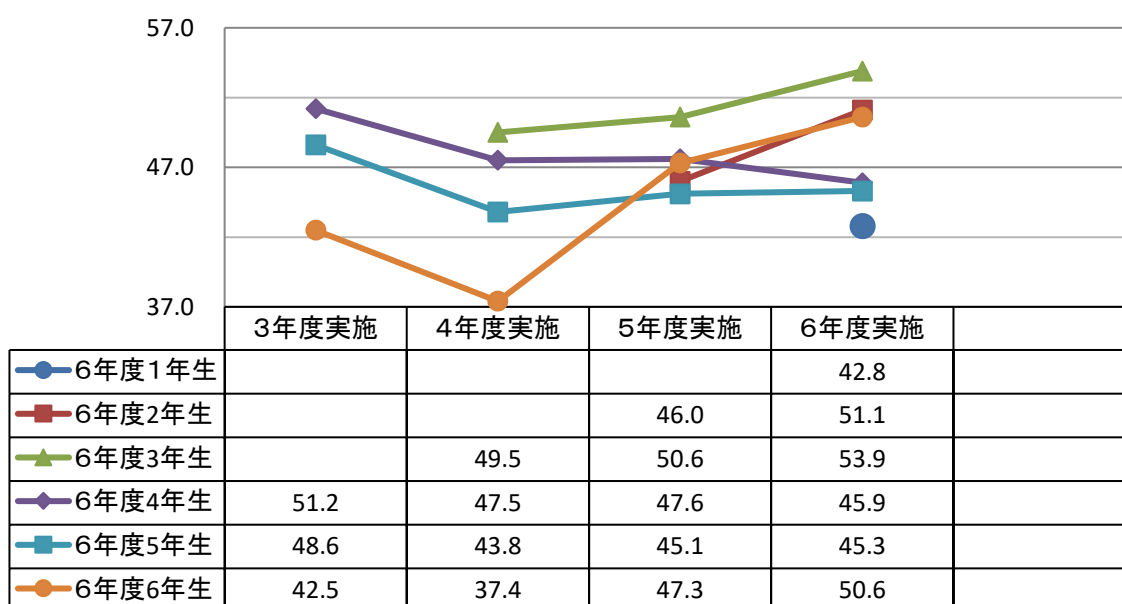
4. 調査結果

※学校平均(国語・算数)4年間の推移

(標準スコア:全国値の正答率を50とした時の換算値)

年度	3年度	4年度	5年度	6年度	
本校(A)	45.8	43.9	47.8	48.2	
嘉麻市(B)	47.0	47.2	48.5	49.8	
(A) - (B)	-1.2	-3.3	-0.7	-1.6	0.0
全国値との差 (A) - (50)	-4.2	-6.1	-2.2	-1.8	-50.0

各学年の標準スコアの推移



5. 各学校における分析

○平均の標準スコアが国語46.7P、算数49.7Pとなり、昨年度と比べて算数科の数値は上回ったものの、国語科では下回り、全体でも嘉麻市目標の49.5Pには至っていない。しかし、経年変化で見えていくと、国語は昨年度より上昇している学年が多い。

○国語科において、「書くこと」の正答率が高い傾向があるものの、「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域の正答率が目標値を下回っている。また、基礎に課題がある。記述式の解答率は、全国に比べて高い学年が多い反面、選択式の正答率が全国に比べて低い。

○算数科において、「数と計算」領域において学習の成果が出ており、基礎・活用ともに、目標値を超えた学年が増えた。しかし、「図形」「データの活用」の正答率が低い傾向があり、活用に課題がある。記述式の解答率が全国に比べて低い学年が多い。

○昨年度に引き続き、算数科単元末評価テストの通過率を把握し、未通過児童を減らす取り組みを行った。単元テスト実施前に形成的評価を行い、個に応じた学習を進めることができるように、指導体制や指導内容を工夫して習熟の時間を設定したことで、児童の基礎的な力の定着につながったと考える。

6. 各学校における今後の取組

○調査結果を職員間で共有する一般研修を実施する。その際、課題だけでなく、成果としての取組を全校で共有し広げていく。

○朝の活動の時間に、読書タイム、学びタイムを実施する。学びタイムにおいては、専科教員が中心に関わり、「算数トレーニング」と「テンミニ+α」を実施する。

○授業においては、学力低位層の児童を考慮して、指導の形態や方法を工夫していく。

○評価テストにおいては、単元テスト実施前に形成的評価を行い、個別最適な習熟になるように、内容を精選したり、複数体制を組んだりする。

○家庭学習においては、AIドリルを活用して個に応じた学習課題の提示を進める。

○月1回のチャレンジタイムを設定し、国語・算数の補充・発展問題に取り組むことができるようにする。その際、専科教員が補充発展問題を選定して実施し、学年間の取組の差をなくす。

○牛隈小算数検定を、家庭学習頑張り週間の取り組みと連動して、学期に1回実施する。児童が主体的に取り組むことができるように、目標設定を行って取り組ませることで、児童の頑張りや称賛し価値づけていく。検定問題においては、計算領域の問題だけでなく、課題となっている領域を盛り込んだものにする。

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

◎各学校における取組を機能化し、学力向上を図ることができるように、特に次の3点について指導助言及び支援を行い、周知徹底を図る。

◆校内における学力向上検証委員会において単元テスト(全単元の80%において目標得点を達成できた児童が学級の80%以上になることを目指す)や各学力向上の取組について検証し、授業づくりや学力向上の取組の更なる改善を図る。

◆学習評価からの授業づくり、書く活動の設定、ICTの活用という視点から授業改善を図る。そのために、校内研修等に指導主事を派遣し、具体的な指導助言や支援を行う。

◆小中一貫教育に基づき、組織的・計画的に内容の設定し、個に応じた課題の提示(AIドリルの活用等)を図ることにより、家庭学習の習慣化及び充実を図る。

